

# 14. 登熟期

## A 登熟期

この米作りの稲は、全体がきれいに黄金色になり、緑色がいつまでも残ったりしません。

出穂から40~50日して、穂軸(枝梗)が先端から2/3ほど黄化したら、適期をのがさないで刈取りします。晴天・高温が続くと適期は早くなり、曇天・低温では適期は遅くなります。刈取りが早過ぎて、青米が多くなるように注意します。刈取りが遅れると胴割れ米が増え、米質が悪化するのが普通ですが、この作り方をした稲は最後まで深い根がしっかり働いているので、ほとんどの田圃で10日ほどは遅れても影響がありません。遅めの刈取りで充分です。

この作り方の籾は皮が薄く、籾殻が少なく、一見した以上に玄米の収量があります。また穂のカルシウム不足による不稔粒も無く、成熟遅れの青米が少なく、揃って登熟するので、屑米もわずかしか出ません。

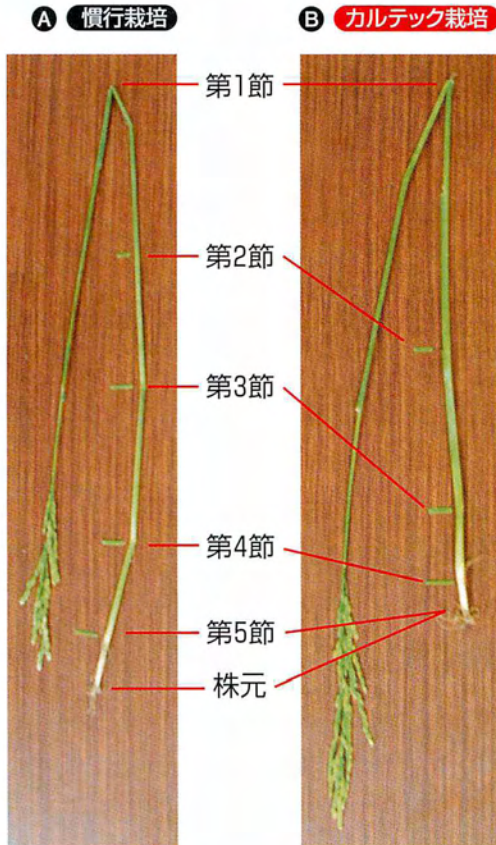
## B 刈り取り頃の稲の姿

1本の茎に、葉は6枚、少なくとも5枚は残っているはずです。上から第1葉(止め葉)は穂肥の影響を受け、その下の第2葉は出穂35日前の稲の体力が反映されます。この二つの葉が大きく厚いので、米粒が充実します。第3葉は大きくなりますが、出穂45日前頃にチッソ過多の場合は第3葉だけが特に細長く伸びてしまいます。下葉(第4葉、第5葉、第6葉)は、分ゲツ肥までの栄養状態が健全なら枯れ上がりが少なくなります。

刈取り頃に稲を診断・確認するには、母茎(一番長い茎)を1本抜いて、上から1節目(穂首の下の節)で折って見てください。第1節より下位~根元までは短く、上位~穂が長くなっているはず。これが倒さず、確実に高品質の米を作る姿です。(右ページ写真B)

慣行施肥のチッソ肥料を効かせた稲では、逆に下位が長く、上位が短くなります。これでは稲の葉はりっぱですが、倒れやすく、米は登熟が悪くなります。(写真A)更に詳しく見れば、下位節間が短い。第4節間も3cmくらいまでと短く、第5節間(最下位の節間)は、ほとんど伸びず、株元に隠れています。(写真B)

この米作りの稲は節の数が一つ少ないと言われるのですが、隠れているのです。



下位節間が短く、しかも細植えによって太く、カルシウム栄養によって弾力がある。

これなら下位節間が折れて、稲が田面にべったり寝てしまうことはまずありえないでしょう。

もし曲っても、腰を浮かせて傾いた状態になります。台風などで45度以上に傾いた場合も、再び立ち上がり、向刈りできるようになる例がよくあります。これが『倒伏が無い』と言っている理由です。

## ◎ 収穫の分析

	条間30cm× 株間18cm	条間30cm× 株間21cm
坪当り株数	50株/坪	60株/坪
1株穂数(平均)	24本/株	20本/株
1穂籾数(平均)	90粒/本	
登熟歩合	85%	
千粒重	22g	
坪当り精玄米重	2000g	
反当り収量	600kg	

収量構成要素を分析し、今年の米作りの反省をしておきましょう。標準反収は600kg(60kg×10俵、4石)としてあります。

- ①坪当り穂数(坪当り株数×1株穂数)は、1000本以上、1200本ほどあるのが標準です。地力による初期分ゲツの進み方、分ゲツ肥による最盛期の分ゲツ確保、過剰分ゲツによるまともな穂の減少などを考えます。
- ②1穂籾数と千粒重は、後半、特に穂肥の与え方に左右されます。